

[特別活動]

児童同士で助け合う 自治的学級集団の育成

—振り返り活動を中核として—

高橋 聡将*

1 問題の所在

(1) 今日の課題から

新潟県教育委員会が発行した「平成27年度学校教育の重点」の6つの中に、「豊かな心などをはぐくむ教育の推進(道徳教育の充実)」と「いじめを見逃さない, いじめを許さない意識の醸成」が設定されている。その背景には, いじめの認知件数や不登校児童生徒件数, 暴力行為発生件数が大きな減少を遂げることなく, 高い数値を示しているという問題がある。これらの発生要因として, 「人間関係の希薄化」「規範意識の低下」が挙げられている。これらの解決を図るために, 重点事項の中で「道徳的实践の中心的な学習活動の場として位置付けられる特別活動については, 道徳の時間との関係を重視した指導を計画的に行う」「絆を深める活動の機会を計画的・継続的に設けることにより, 児童生徒に関わり合う喜びを実感させ, コミュニケーション能力や人間関係づくりの能力を育成する」と述べている。

また, 新潟市教育委員会においても「学校教育の重点」として, めあてをもち, 自己決定し, 自主的に行動する「自律性」と, 互いに認め合い, 支え合い, 高め合う「社会性」を育む生徒指導推進を掲げ, 他者との望ましい関係を築き, 「自立」する姿の実現を目指している。

新潟県教育委員会や新潟市教育委員会の目指すような力を育成するためには, 日常での「児童同士のかかわり合い」の担う役割は極めて大きい。さらに, 児童同士で助け合い, 一人一人がよりよい学級集団の一員となり, それを自覚していくことが大切であると考ええる。

(2) 児童の実態から

本学級は, 児童25人の4年生である。前年度の11月に実施したQ-U (Questionnaire-Utilities楽しい学校生活を送るためのアンケート) のいごこちのよいクラスにするためのアンケートでは, 学級満足群15人:63% (全国平均41%), 侵害行為群5人:21% (全国平均17%), 学級不満足群4人:17% (全国平均23%) であった。

当学級は, 学年が単学級であるため, 基本的には1年生から同じメンバーで学級が構成されている。しかし, 休み時間になると, 遊び方や生活行動の違いなどから, 口げんかをしたり, 暴力的な行為をしたりする姿がしばしば見られた。学級全体で遊んだ時でも, 途中で抜けるなどの自分勝手な行動をしたり, 相手を挑発してけんかをしたりするなどの様子が見られた。また, 授業中には, 思ったことを口にしないと不満をもつ児童が数名見られ, 指名された児童が発言をする前に, 割り込んで発言をするようなことも見られた。その状態を見て, 4月に児童に「自分のクラスはどんなクラスか?」というアンケートをとったところ, 「けんかが多いクラス」と答えた児童が, 半数以上の13人もいた。また, 「これからどのような学級にしたいか。」という質問には, 「けんかがなくなってほしい」と答える児童も13人いた。さらに, この内の5人は, 初めの質問に「けんかが多いクラス」と答えていなかった。このことから, 8割程度の児童が「けんかが多い, けんかがなくなってほしい」と思って過ごしていたのである。

河村(2012)は, 学級の70%以上が満足群と侵害行為群にあり, 基本的な行動スタイルが児童生徒間で共有されていない学級を「ゆるみの見られる学級集団」としている。「ゆるみの見られる学級集団」とは, 「リレーションはある程度あるが, ルールが不足しているために, 小グループ内で人間関係を築くのみに留まっている」「『学級としてまとまろう, 向上しよう』という意識を喚起するはずの『意欲』『ほどよい緊張感』の低下が見られる」とし, 授業中に私語や手遊びが見られたり, 勝手な行動や発言をしてしまう児童生徒がいたり, 児童生徒同士の間でトラブルが見られたりするという。また, 「子ども同士の交流が少なく, 1人1人がバラバラの状態, 集団への所属意識も低い, 学級のルールも

* 新潟市立大淵小学校

共有されていない学級集団の状態」としている。

以上のことから、当学級は河村（2012）の言う、「学級のルールが定着していない、授業・活動などの基本的な行動スタイルが児童生徒の間で共有されていない状態」に当てはまり、「ゆるみの見られる学級集団」であると言える。

この現状を乗り越えるために、児童同士がかかわり合い、人のために行動する喜びを実感させ、コミュニケーション能力や人間関係づくりの能力が育成された、お互いを助け合う学級集団にしたいと考えた。河村（2012）は、「自治的集団成立期」に達すると、「親和的なまとまりのある学級集団」が成立するとしている。「親和的なまとまりのある学級集団」とは、「子どもたちが主体的に生き生きと活動し、教師がいないときでも、ある程度の活動ができる」「親和的な関係があり、子ども同士のかかわり合いや発言が積極的で、学級全体に活気があり、笑いが絶えない学級」と述べている。本研究では、この「親和的なまとまりのある学級集団」を「自治的学級集団」として目指すこととする。

さらに、河村（2009）は、「安全が守られ安心して生活・活動できると思える状態」を達成するためには、1つ1つのやり方について手本を示すなどして理解させていく「教示的な対応」が必要であると述べている。また、今の中学年の児童には「学級集団のなかで、他人を通して自分を客観的に見る機会を、意図的に与えていくことが、必要になっている」、「原則を伝えて応用させるというより、具体的な行為行動を教えていくことが必要」とも述べている。よって、お互いが助け合う自治的学級集団にするためには、行為行動について具体的に教え、その行為行動について自分を客観的に見る機会を設けることが必要であると考えられる。

（3）先行研究から

高橋（2014）は、「自分たちで課題を発見することができるようになったことで、課題の共有化や話し合う必然性が生まれ、切実感をもって本音で話し合うことにつながった」と述べている。さらに、「自問と話し合いの充実を図ることが、自治的集団を育むサイクル（成長の省察→課題の発見→取組の選択→取組の実践）を機能させ、子供たちと共に創る自治的学級に近づくことに有効であった」と述べた。

また、日本能率協会マネジメントセンター（2013）は、「P（計画）D（実行）C（検証）A（改善）」サイクルのポイントを次のように述べている。まず、『C』から始めること。なぜなら、「P」から始めても、目標設定がその時々状況を踏まえていなければ、計画は一気に妥当性を失ってしまうからだという。また、「重要なことは、過去を振り返り、徹底して問題点を抽出したうえで、新たな改善策を考えていくこと」だという。さらに、『C』を見える化して、一人よがりなくす」ことについて述べている。振り返る会議を行い、現状認識、問題意識を共有化することで改善を推進するという。その後の「D」では、「改善意識の有無&強弱が、実行力の差になって現れる」と述べている。

つまり、一人一人が学級の課題について共有し、「改善する」という自覚を高め、「PDCAサイクル」を行うことで自治的学級集団に近づくことができるということである。

そこで、本研究では、「PDCAサイクル」を取り入れ、一人一人が全体のためになる行動について自覚を高めて改善への取り組み、振り返りをとおして自治的学級集団を形成していくこととする。学級全体の課題を共有し、常に意識し、振り返りをすることで、友だちとのかかわり合いが変容し、児童同士で助け合えるようになるかを検証する。

2 研究の目的

小学校4年生の学級において、お互いを認め合い、児童同士で助け合う自治的集団を具現するために、児童自身が学級の課題を共有し、日常生活や活動などの目標を決め、実行し、振り返りをする「PDCAサイクル」に取り組む。「PDCAサイクル」の中でも、特に「C」の「振り返り」を中核とし、「自覚を高める」ことの有効性について検証する。

3 研究の方法

私の学級経営の基本方針として、「全員でやると決めたことは、全員が最後まで取り組む」ということがある。常に何かの目標をもたせたり、理想とするゴールを児童と話し合って設定したりすることで、子どもが主体的に行動したり、努力したりするからである。そして、がんばっている児童を称賛することを大切にしている。河村（2012）も、「ゆるみの見られる集団」の再検討ポイントとして、「児童生徒の願いを取り入れた、『理想の学級』の状態を確認する」「ルールをきちんと守って行動している児童生徒を積極的にほめて、そのような行動を学級内に奨励していく」と述べている。この方針の中で、振り返りを中核とした「PDCAサイクル」の取り組みを検証していく。

（1）月一振り返りアンケートの実施

高橋（2015）の研究より、「成長の省察」と「自分たちで課題を発見する」ことが自治的集団を育むサイクルの最初

であり、大切であるため、学級の様子について毎月月末に振り返りを行った。振り返る項目は次の二点である。

- ①今月のクラスはどのように変わったか。(学級全体の状況の把握) ②自分はクラスをこれからどのように変えたか。その理由は何か。自分はどのようにしていきたいか。(翌月の自分の課題)

振り返りは10分程度でプリントに書き、教師が回収した。そして、教師が集約し、全体に課題を示した。

(2) 「学級の課題についての自己評価」の実施

6月中旬、「けんかが少なくなってきた」という児童の声が多数聞かれるようになってきた。日本能率協会マネジメントセンター(2013)は、「取り組むべき課題を細かく分解し、その分解した項目で小さなPDCAを回すことが大切だ」と述べている。

そこで、6月19日に、「4年生の学級をもっとよくするためのアンケート」を行った。アンケートには、さらに改善するとよくなることを書かせ、まとめたものを全体に発表し、教室内に掲示した。そうすることで、学級の課題を全員で共有でき、日頃から意識すると考えたからである。そして、児童から出された具体的な課題について一週間に1つずつ「強化週間」として取り組んでいくこととした。振り返りは、個人にプリントを配付し、「◎○△」の三段階での自己評価とし、毎日帰りの会でを行った。一週間の最終日には、取り組んだ感想を書いた。

(3) 目的意識をもったお楽しみ会の実施

お楽しみ会を行う直前に、「お楽しみ会の目的」「楽しむための自分のめあて」「めあてを達成するための行動」について一人一人がプリントに書いた。そして、お楽しみ会終了直後、「めあてが達成できたか」「お楽しみ会をもっとよくするためにはどうすればよいか」についての振り返りを行った。直前、直後に確認させることで、自覚をもって行動できると考えたからである。それぞれの会の目的等は以下のとおりである。

① Sさんと仲良くなるう会(5月1日)

4月に転入してきたSさんが学級の友達の名前や顔を早く覚えることができるように、お楽しみ会を開いた。

② M先生ありがとう会(6月23日)

教育実習に来ていたM先生とのお別れ会として、M先生の得意なバレーボール、みんなが楽しめる「いつ、どこでゲーム」などの遊びを考えて活動した。この活動は、前回のSさんと仲良くなるう会で相手を意識していたことを手掛かりに、何のためにこの会を行うのかを児童から出させ、自分がみんなのためにどのような気持ちで活動をするのかを意識できるように仕組んだ。

③ 4か月がんばったね会(7月23日)

前の2つの活動を受けて、「みんなが楽しめる会にしよう」を全体のめあてとし、さらに個人の活動のめあても決めて活動を計画した。

4 実践の概要

(1) 月一振り返りアンケートの実施

「①今月のクラスはどのように変わったか」の結果

月	プラスの表現	マイナスの表現
4月	・元気いっぱいクラス(3人) ・楽しいクラス(2人) ・おもしろいクラス	・けんか・泣く人の多いクラス(14人) ・助け合いがない(3人) ・すぐ話してとてもうるさい
5月	・けんかが減って、仲が良くなってきた(13人) ・静かになるのが早くなってきた ・すごいことを思い付くと思った ・解決方法を考えられるようになってきた ・健康なクラス	・けんか・泣く人が少し多い(6人) ・少しうるさい ・諦めている
6月	・けんかがなくなり、仲良くなった(15人) ・明るくなった ・私語がとて減った ・自分なりの方法で考えられるようになってきた ・みんなで協力するようになってきた(2人)	・元気で楽しくなった ・メリハリがついた ・助け合いが多くなった
7月	・けんかも泣く人も全くなかった(8人) ・いいことが多くなってきた(2人) ・物を大切に使う、忘れ物が減った(2人) ・男女関係なくみんなでよく遊ぶようになった(8人) ・目標を達成する人が多くなってきた ・自分の仕事をきちんとするようになった	・助け合っている ・譲り合いができるようになってきた ・私語がなくなった ・楽しく明るいクラスになってきた ・メリハリがついてきた ・笑顔が増えた

「②自分はどうのようにしていきたいか」の結果

4月	・けんかをしない、なくす(10人) ・仲良くなりたい(5人) ・明るくしたい ・助け合いたい ・泣かないようにしたい(2人) ・もう少し静かにしたい(3人) ・もっと楽しくしたい ・応援する
5月	・もっとけんかをなくす(8人) ・もっと仲良くする(4人) ・いじわるをしない ・怒鳴らない ・元気にしたい ・泣く人を「0」にしたい(3人) ・人に優しくしたい(2人) ・まともなクラスにしたい ・あきらめないクラスにしたい
6月	・泣く人をなくす(4人) ・いやみを言わない ・人の話を聞く ・クラス全体でまとまりたい ・物を大切にしたい ・けんかも泣く人もなくして、楽しいクラスにしたい(5人) ・もっと協力して仲良くしたい(6人) ・もっと親切にしたい ・心の優しいクラスにしたい ・元気なクラスにしたい ・明るくなるようにしたい
7月	・けんかをしないように楽しく遊びたい ・けんかをしないようにけじめをつけたい(2人) ・もっとメリハリをつけたい ・けんかをしないようによくふれ合いたい ・泣く人がもっと減るように、声をかけていく(2人) ・人が困ることや人を傷つけることをしない ・仲のいいクラスにするために呼びかけたい(2人) ・けんかをしている人がいたら止める(3人) ・けんかのもとを作らないように気を付けて仲良くする(5人) ・何にでも一生懸命に取り組んでいきたい ・友達に声をかけてたくさん遊び、仲良くなる(2人) ・たくさんの人ともっと仲良くなりたい(2人) ・もっとまとめられるように声を出していきたい(3人)

4月には、マイナスの表現が多く見られたが、月日が経つごとにマイナス表現が減っていき、プラスの表現に変わっていったことが分かる。7月にはマイナスの表現を書く児童が誰もいなかった。それに伴い、「②自分はどうのようにしていきたいか」という項目も、7月には具体的な表現に変わっていったことが分かる。これは、振り返りを繰り返すことで、自分達にはどんなことが足りていないのかが明確に見えるようになってきたことが考えられる。また、4月から6月まで課題解決への自覚を高めて改善してきたことで、7月の課題には、具体的にどのように行動すればその課題を改善することができるのかを理解することができてきたからであると考えられる。

(2) 「学級の課題についての自己評価」の実施

「けんかが少なくなってきた」という声がたくさん聞かれるようになってきたので、「もう課題のない素晴らしい学級」かどうか尋ねた。すると、「まだ細かい課題がある」という反応であった。そこで、「さらにこのクラスがよくなるためにはどんなことが必要か」を全員で話し合い、出た課題を分類したところ、次の4つになった。

①自分の行動を振り返る ②みんなで楽しくなれることを考える ③相手のことを考える ④勇気をもつ

さらに、どの課題から取り組むか話し合ったところ、「①自分の行動を振り返る」で、全員が納得した。具体的な内容と自己評価については、表1のとおりである。

表1 「よりよいクラスをめざしての振り返り」の割合

取り組んだ課題	よくできた	できた	できなかった
①泣く人が「0」になるように行動する。	91.2%	4.8%	4.0%
②自分が手本となる行動をとる。	93.9%	6.1%	0.0%
③人が間違えても笑わない。「ドンマイ」と言って応援する。	88.6%	10.4%	1.0%
④悪口を言わない。	97.8%	2.2%	0.0%

児童の感想を見てみると、「今度は助けてあげたい」「下学年の手本となる行動ができて嬉しかった」「みんなができていいと思った」などの感想が多数見られた。回数を重ねていくと、「一週間だけでなく、これからも続けたい」という感想が見られるようになってきた。これまでの自分達の行動を振り返ることで、「もっと改善していこう」という意欲が出てきたためと考えられる。また、7月の日記に学級の様子が変わってきた喜びを書き、最後に「振り返り、とてもいいと思います。」というコメントを添えるなど、振り返りを実施する良さを児童が実感できていた。どの課題についても強く意識することで、児童自身の中で満足のいく結果となり、この手立てが効果的であることが分かった。しかし、「人が間違えても笑わない」「悪口を言わない」については、課題が具体的であったが、「泣く人が『0』になるように行動する」「自分が手本となる行動をとる」については、どのような行動をとるとよいのかについて共通理解が図られなかったため、曖昧になっていた。そのため、自己評価に差が出てしまった。行動についてさらに具体的に話し合う必要があった。

(3) 目的意識をもったお楽しみ会の実施

各活動後、以下のような児童の変容を捉えることができた。

① Sさんと仲良くなろう会(5月1日)

Sさんと仲良くなりたいと思った以外に、男女仲良く遊ぶことの良さ、学級全体で活動することの良さに気付いた児

童が2名いた。

② M先生ありがとう会（6月23日）

「お楽しみ会が楽しかったか」という質問に対し、全員が「楽しかった」と答えた。A児は振り返りに、バレーボー
ルでゆう勝はとれなかったけど、M先生が楽しんでいたのでうれしかったです。と書いた。

これは、Sさんと仲良くなるう会では見られなかった感想である。そのような感想が複数の児童から見られた。「M先生が喜んでくれたから楽しかった」が6名、「協力できたから」が6名、「一生懸命やったから」が3名という感想から、「相手のためにがんばる」ということが自分の喜びとなった児童が増えてきたことが分かった。一方、最後に「今日のお楽しみ会をもっとよくするためには、どうすればよいか」のアンケートでは、「勝ち負けで泣いている人がいたので、それをなくしたい」が8名、「素早く行動できなかつたので、もっと素早く行動する」が3名というマイナス面だった。相手のためにがんばれる児童が増えてきた一方で、目的からそれてまだ自分自身が優位にいないとおもしろくないと考えている児童がおり、周りに不快感を与えていることが分かった。

③ 4か月がんばったね会（7月23日）

ここでは、全員が仕事を担ってお楽しみ会を運営した。「始めの言葉」などの、一人で準備する児童が数名いたが、自分の仕事が終わると、ゲームを考える係などの複数名で構成されたグループへ進んで入り、一緒に考える姿が見られた。「M先生ありがとう会」での「協力することの良さ」を理解できてきたことが伺えた。会の運営に当たって、前回の反省を踏まえたためあてを一人一人にもたせた。当日は、教師からは特に指示を出すことなく、全員が各担当児童の指示に従い、会が進行していった。「お楽しみ会が楽しかったか」という質問に対し、今回も全員が「楽しかった」と答えた。感想を見てみると、「もめ事にならなかった（泣かない、楽しそうに笑っていた、仲良くできた）のがよかった」が14名、「てきぱき動くことができた」2名であった。その他にも、「譲ることができて嬉しかった」「たくさんの人が『すごいね』と言ってくれた」「ゲームを工夫したら楽しんでもらえた」など、達成感や満足感で満たされていることが分かる感想が見られた。さらに、「今日のお楽しみ会をもっとよくするためには、どうすればよいか」のアンケートには、B児は「これが最高です」と書いた。全員が助け合うことで、「みんなが楽しめる会」、「達成感、満足感の得られる会」になったことが分かった。この結果から、「PDCAサイクル」を活用することで、徐々に活動の目的を意識して活動できるようになっていったことが分かる。

この結果より、児童一人一人が目的意識を強くもつことで、行動が変容し、児童同士が助け合い、児童だけでお楽しみ会を運営できるようになってきたと考えられる。

5 研究の成果と課題

(1) 成果

「振り返り」を中核とした「PDCAサイクル」を行うことにより、学級の変化が分かる日記の記述が増えた。

C児【6月1日】

わたしは、4年生がいいクラスになるにはまず、ケンカをゼロにした方がいいと思います。そして、休み時間の時などに、みんなで遊ぶ日を作った方がいいと思います。

理由は、ケンカをしていると、楽しくなくなるからです。なにをしている時でも、仲よくすると、みんなが楽しくなるからです。

次に、休み時間にみんなで遊ぶ機会があるといいと思います。理由は、みんなで遊ぶときずなも深まって、仲よくなるからです。そして、その時に、ケンカがなければすごくいいと思います。

これから、休み時間などにケンカがゼロのクラスにしたいです！

D児【6月11日】

いつも学校に来ているとき、けんかが少なくなったと思います。

前はけんかが多くて、みんながいやな気持ちだったけど、さいきん、みんないい気持ちになっているような気がするのいいと思います。これからも、けんかをもっとへらしていきたいです。

E児【7月2日】

今日、帰りの会のふり返りの時、わたしは、4年生は元気で仲よしで、泣く人もいなくて、えがおいっぱいとてもいいクラスだなと思いました。

元気では、休む人が少ししかいないからです。仲よしは、さいきん、男女関係なく仲よく遊んでいるからです。泣く人も少なくなってきたから、いいと思います。あと、25人みんなえがおで、わたしはとてもうれしいです。これからも、みんな

仲よしでたいです。(ふり返り、とてもいいと思います。)

F児【7月13日】

最近、4年生が変わってきています。何が変わってきているかと言うと、笑顔、人にやさしいこと、物を大切にすることです。前は、ボールなどを投げてかごに入れていたけど、今はちゃんとやさしく入れているのでいいと思います。もっと4年生を変えていこうぞ！

上記の日記より、月日の経過とともに学級がよりよい方向へ変容していると、児童自身が実感していることが分かる。6月1日の時点では、「いいクラスにするための方法」のみを記述していたが、6月中旬になると、「改善した点と、さらに改善するとよい点」への記述に変容し、7月には、「改善した点と現状維持以上の目標」への記述に変容している。また、休み時間の遊び方にも変容が見られた。E児の日記にもあるように、男女が一緒に遊ぶようになったのである。4月には遊びの違い(男子はボール遊び、女子は鬼ごっこ)から、一緒に遊ぶ姿は見られなかったが、お楽しみ会などをおして「大勢で遊ぶと楽しい」ことに気づき、誘い合うようになっていった。会話を聞くと、「女子が鬼ごっこが好きだから、鬼ごっこで遊ぼう」や「男子がバスケをするって言うから、一緒にやってみよう」など、「一緒に楽しく遊ぶために譲り合う」様子が伺えた。休み時間の様子や7月の日記から、河村(2009)の言う「親和的な関係があり」「子ども同士のかかわり合いが積極的」「活気があり、笑いが絶えない学級」の姿を達成していると言える。さらに、「4か月がんばったね会」の準備等で見られた「自分の仕事が終わると進んで、他の活動を考えているグループに入る」という姿から、河村(2009)の言う「子どもたちが主体的に生き生きと活動し、教師がいないときでも、ある程度の活動ができる」ことも達成できていると言える。さらに、Q-Uの結果も変容した。

3年生11月		4年生7月	
学級満足群	15人(満点4人)	学級満足群	25人(満点12人)
非承認群	0人	非承認群	0人
侵害認知群	5人	侵害認知群	0人
不満足群	4人(要支援群0人)	不満足群	0人(要支援群0人)

図1 【いごちのよいクラスにするためのアンケートの比較】

このQ-Uの結果からも、河村(2009)の言う「親和的なまとまりのある学級集団」、つまり、筆者の目指す「自治的学級集団」に近づいてきたと言える。よって、「振り返り」を中核とし、目的や課題を強く自覚させた「PDCAサイクル」は、自治的学級集団の育成に有効であったと言える。

(2) 課題

Q-Uの調査で全員が「学級生活満足群」入ったが、日頃の会話や行動を聞いたり見たりしていると、不満も持っていることが伺える時もある。データの結果だけにとらわれず、児童の日常の様子から手立てを変更したり、新しく行ったりと、細かい「PDCAサイクル」を作っていく必要があると感じた。

また、児童同士の積極的な発言やかかわり合いになかなか入れない児童も見られる。現在は、教師の支援によって入ることが可能であるが、今後は、児童自身が進んで入っていけるような手立てを講じていきたい。

本研究は、4か月間という短期間の実践を考察したに過ぎない。本学級においては、「決めたことは全員でやり通す」という学級経営方針の基、現在も振り返り活動を取り入れ、継続して実践している。先に述べた課題が顕在化しないように予防していくとともに、手立ての改善を図り、「自治的学級集団」への育成を目指す。

参考・引用文献

- ・新潟県教育委員会「平成27年度 学校教育の重点」
- ・新潟市教育委員会「平成27・28年度 新潟市の学校教育」
- ・河村茂雄「学級集団作りのゼロ段階 [Q-U式学級集団作り入門]」 図書文化 2012年
- ・河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗「Q-U式学級づくり 小学校中学年 ―ギャングエイジ再生『満足型学級』育成の12か月―」 図書文化 2009年
- ・日本能率協会マネジメントセンター「仕事が早くなる！CからはじめるPDCA」 日本能率協会マネジメントセンター 2013年
- ・高橋健一「子供たちと共に創る自治的学級―自治的集団を育むサイクル―」 教育実践研究 第25集 2015年
- ・長澤虎幸「心許し合える学級集団に向けた取組」 教育実践研究 第23集 2013年